



写真1
『日寇暴行実録』に掲載の写真。写真に写る人物の影の方向が一致しない。斬首する人物の足の出し方が反対である。合成写真であろう。

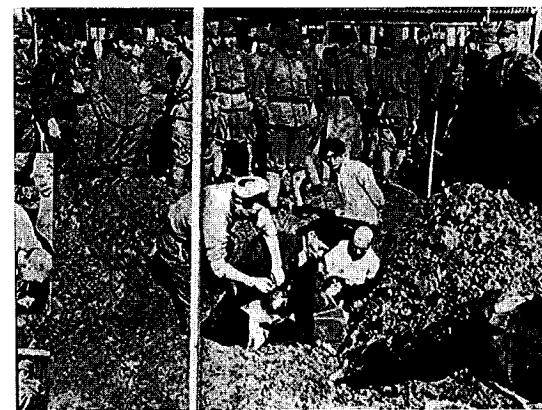


写真2
初出は『日寇暴行実録』。誰のものか不明な影、立ってみている兵士の視線がバラバラ、など不自然な点が多い。合成写真であろう。本多勝一「中国の旅」の写真説明は、「穴を自分で掘らせ、生き埋めにしている日本軍（新聞司提供）」となっている。

一枚もない

南京事件「証拠写真」

溝口郁夫
南京事件研究家

これまで「南京事件」の証拠であ

ると称する写真が数多く流布している。例えば、中国南京市にある「南京大屠殺記念館」（俗称）には出所不詳の写真、出所が明確でも日本の新聞・雑誌などの写真を「合成」「演出」「ひそかな転載」「キャプション改竄」したものが数多く展示され、また写真集として販売されている。

にも陳列されている。私は二年前に、東中野修道教授らと共に「南京事件「証拠写真」を検証する」（草思社）という本を出版した。

本稿では、これらの写真の代表的なものを取り上げ、「証拠」として通用する写真は一枚もないことを概説したい。

「南京事件」とは、日中戦争の際、昭和十二年十二月の南京陥落以後、六週間にわたって日本軍による虐殺、

暴行、強姦、略奪、放火が生じたと言われる事件の総称である。

南京陥落から半年後の昭和十三年七月に早くも、ティンパリー編『戦争とは何か』と、その漢訳版である『外人目撃中の日軍暴行』が世界で初めて出版され、日本軍は残虐と喧伝された。

国民党宣伝部による工作

近年、これらの著書と深く関係する中華民国時代の国民党宣伝部の

「極機密」文書『中央宣伝部国際宣伝

処工作概要』（昭和十六年）の存在が北村稔立命館大学教授や東中野修道、亜細亜大学教授らによって確認され、次のことが明らかにされている。

①『戦争とは何か』は、国民党宣伝部が工作し出版した「宣伝本」で

あった。

②国民党宣伝部の宣伝工作の対象に「南京大屠殺」はあげられていなかった。

宣伝工作は「強姦、放火、略奪、要するに極悪非道の行為」が対象であり、そこには「虐殺」の文字がない。

この宣伝工作の一環として、国民党宣伝部は戦争プロパガンダのために中国の「国際友人」に代弁してもらう動きをとる。

『戦争とは何か』の編集は、国民党中央宣伝部顧問でもあったハロルド・ティンパリー特派員（マンチエ



写真4
『朝日版支那事変画報』（昭和12年12月5日号、裏表紙）、写真説明から日本軍は代価を払って鶏を買ったことがわかる



写真3
『日寇暴行実録』より。「日本軍が農民の子羊を奪い取って引っこさげていく。」「日本軍の行くところ略奪されて鶏も犬もいなくなった」と説明。『本多勝一全集14』などにも掲載。

これまで「南京事件」関係の書籍は国外の出版物が主体であったが、日本国内でも出版される状況が現出する。「中国の旅」はその嚆矢であった。ここでは、第一期の「源流」の写真六十三枚

本多勝一書籍でも日本と中国の国交が回復した昭和四十七年（これ以降、約十年間を第三期と呼称）に、本多勝一氏の著書『中国の旅』と『中国の日本軍』が日本で出版され、南京事件の「証拠写真」と称する写真が数多く掲載され始めた。



写真5
『日寇暴行実録』掲載の写真。初出は『アサヒグラフ』（昭和12年11月10日号）

のなかの写真3と写真5をとり上げ、「キャプション改竄」の例を紹介する。この写真3の元写真である写真4は、南京陥落の十二月十三日以前に

スター・ガーディアン紙、オーストラリア人）であり、分担執筆したマインナー・ベイツ師（南京大学教授で宣教師、アメリカ人）は国民政府の顧問、またジョージ・フィッチ師（南京YMCA勤務、アメリカ人）も分担執筆したが、その妻は蒋介石夫人の親友であった。

また、国民党宣伝部が「戦争とは何か」やスマイス編『南京地区における戦争被害』（昭和十三年）の出版のために資金を出していることも、国民党宣伝部国際宣伝処長だった曾虚白の「曾虚白自伝」（昭和六十三年）によりすでに明らかになっている。

「証拠写真」の源流

南京虐殺があったとする書籍が数多く出されている。そこには登場頻度の高い「写真」が添えられている

場合が多い。それが写真1や写真2などである。

ところで前述の英文の『戦争とは何か』に写真は掲載されていないが、昭和十三年七月に出された漢訳版の国民政府軍事委員会政治部編『日寇暴行実録』（現在はスタンフォード大学フーバー研究所所蔵）には写真が三十九枚、同じく漢訳版のティンパリー編『外人目撃中の日軍暴行』（香港版も存在するが漢口版を対象とした）には三十一枚が掲載され、合計七十枚である。この二冊の本に共通の写真七枚を差し引くと、源流の写真は六十三枚であることが分る。

昭和十二年から十三年（この間を第一期と呼称）にかけて登場した六十三枚の写真は次のような性格のものである。

①撮影者、撮影時期、撮影場所の不明な写真がほとんどであり、判明

している写真は十点ほどである。

②元本の写真の説明を改竄し、転載した写真、演出と思われる写真がある。

③日本軍が南京を占領した冬の季節にそぐわない写真が多い。場所も南京であることが明確でない。

④大量虐殺を示す写真は一枚もない。十数体の写真が二枚あるだけで、ほとんどが一体か二体の写真で、子供や女性の写真が目立つ。

また、戦後、東京裁判・南京裁判の行われたころに出版された『中国抗戦画史』（昭和二十二年）に「南京大屠殺」「死人三十万」と題して写真が掲載されており、前述の写真六十三枚のうち写真1や写真2など七枚が同じものである。その後、昭和四十六年までは南京事件に関連した目立った動きはほとんどない（この時期を第二期と呼称）。



写真7
「南京大虐殺の現場へ」221頁より。この写真は昭和22年の南京裁判まで隠されたとされる。背景の類似した写真が、昭和13年7月発行の漢訳版『外人目撃中の日軍暴行』のなかに載っていた。



写真8
史詠・尹集鈞著『ザ・レイプ・オブ・ナンキン』119頁に掲載。

載されていたことが秦郁彦氏により突き止められた。写真の説明には「我が兵士に護られて野良仕事より部落へかへる日の丸部落の女子供の群」とある。

本多氏は、自社の発行した『アサヒグラフ』を十分検証することもなく、『本多勝一集14』の「中国の旅」編に写真を追加していたのである。

またぞろ出てくる「証拠写真」

昭和五十七年、歴史教科書における「侵略→進出」の書き換えの有無をめぐって新聞の誤報事件が外交問題化する（教科書誤報事件の前年以降、十四年間に第四期と呼称）。この第四期に南京大虐殺を主張する書籍が次々と出てくる。

南京裁判から約四十一年経過した昭和六十三年に出版された洞富雄、藤原彰、本多勝一著『南京大虐殺の現場へ』のなかに「南京裁判」に提出したという「十六枚の写真帳」（仮称）の話が出てくる。その概要は以下の通りである。

「一九三七年〜三九年のいつだったか確定することはできないが、日本



写真6
「ライフ」誌に掲載。

発行された『朝日版支那事変画報』（昭和十二年十二月五日号）に既に出ていたものである。

その説明には「支那民家で買い込んだ鶏を首にぶらさげて前進する兵士（十月二十九日京漢線豊楽鎮にて小川特派員撮影）」とある。

ところが、平成七年発行の、『本多勝一集14』（「中国の旅」編）のなかでは、この写真3を「ヤギや鶏などの家畜は、すべて戦利品として略奪された」と説明されている。

日本軍が買い込んだものに対し支払いをしていた事実は無視され、改

竄されているのである。

さらに、写真3は、昭和四十七年発行の『中国の旅』には掲載されていないのであるが、本多氏は『中国の旅』発行の二十三年後、この全集に写真を追加していたことが判明している。

また、本多氏は写真5も『本多勝一集14』に新たに追加した。そこには「婦女子を狩り集めて連れてゆく日本兵たち。『強姦や輪姦は7、8歳の幼女から、70歳を超えた老女にまでおよんだ』と説明されている」と記述されている。

この写真5は、笠原十九司氏も自著『南京事件』に掲載し、「日本兵に拉致される江南地方の中国人女性たち（後略）」と説明している。

その後、この写真は『アサヒグラフ』（昭和十二年十一月十日号）に掲

URGENT

安いに飛びつく卑しさが失敗の始まり。

コンピューターの本質は速いにあり。

部分最適化が、初期投資の要。

コンピューター企業と自社の担当部署によるギルドを知れ。

パソコンは極めて知的な趣味。無限の創造も。

著名メーカーの売り文句の欺瞞に欺かれるな。

売るだけなのが■販店。商品知りのコンピューター知らず。

パソコンにも哲学ある COMPUTER PRO SERVICE **USER SIDE**

パソコンは、工業製品としては最低品質のパーツの集合体

※限度を超えたコストダウン。中国製が大半。

TEL 03-5209-5770 users-side.co.jp

パソコンのことなら、法人様も個人の方も。

(株)ユーザース・サイド

が、すべての撮影機材や、その他の材料、取材したフィルム数千枚を、全て中央通信社撮影部に渡し、並びに毎月手当てを出して、力を結集して、撮影効能の展開を期したことから始まる」

すなわちプロバガンダ写真の本格的活動は昭和十三年春であることが分る。そのためであるうか、半袖や薄着姿の人物が目立ち、季節があわない写真が多い。冬の十二月にはほとんどどの市民が着ていたであろう「厚手の支那服」の死体写真がほとん

どないことも納得できる。

証拠写真は一枚もない

南京陥落後の六週間で二十万、三十万人虐殺というからには、この大虐殺を証明する写真が存在しても不思議ではない。

しかし、二十万、三十万人の虐殺を裏付ける写真は皆無である。強姦、放火、略奪をしたという「証拠写真」も一枚もない。

いずれにしても、「南京事件」の証拠写真として通用する写真はないの

が真相である。

(参考資料)

東中野修道・小林進・福永慎一郎「南京事件「証拠写真」を検証する」(草思社)

新しい歴史教科書をつくる会「史」四十九号(平成十七年三月)

みぞくちいくお
一九四五年鹿児島県生まれ。北海道大学工学部卒業。鉄鋼会社を経て現在設計事務所自営、技術士。「日本「南京」学会」、「南京事件検証会」、「マスコミの報道を正す会」各会員。長年、虚報「百人斬り競争」、南京事件の研究を続ける。著書に共著「南京事件「証拠写真」を検証する」(草思社)。

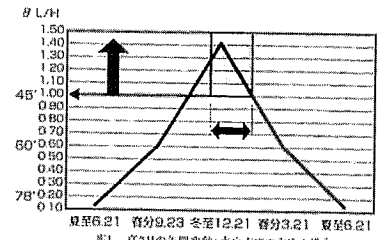


図1 影の長さLと高さHの関係

軍の兵隊が写真の焼付けを依頼した。南京の写真館の店員Aさんは依頼された写真を一セット余分に焼き自分のものにした。これを一九四一年に拾ったBさんは、戦後まで隠し続け南京裁判に提出した。この写真は谷寿夫の戦犯裁判の証拠とされた。」

「南京大虐殺の現場へ」には、十六枚中の七枚の写真が掲載され、写真2(前出)と写真6がそのうちの二枚である。

写真2は南京裁判の七年前の昭和十三年七月発行の『日寇暴行実録』に、写真6は昭和十三年一

月十日号の『ライフ誌』にすでに掲載されていたものである。

『ライフ』誌では「徹底的な反日家であった中国人の首が、南京陥落直前の十二月十四日、南京郊外の鉄条網のバリケードにくさびで打ちつけられた。その首は、凍るような天候のなかで良好な傷みのない状態で、南京の方に顔を向けていた」と説明されているが、それが誰の仕業なのかの明示はない。そのためしばらく使われることはなかったが、四十五年後に「南京大虐殺―「まぼろし」派工作批判」(現代史出版会)が取り上げると、それがきっかけとなって続々と国内外の書籍に取り上げられるようになった。

「十六枚の写真帳」には写真7も掲載されている。

一見しただけで兵士は薄着姿であ

り、南京陥落の十二月中旬ではないと言われてきたのであるが、決め手がなかった。

だが、写真をよく見ると、写真7の背後の観衆、樹木が類似した写真8のなかには、人物の右足の下に影が明瞭にできている。

踵から影の端を結ぶ線と地面のなす角度θは七八度と計測される。南京での冬の南中(ほぼ正午)時の理論角度から、南京陥落の十二月ではありえないことが判明、季節を五、六月ころと特定できるのである(図一)。

前述した国民党宣伝部の極秘文書「中央宣伝部国際宣伝工作概要」のなかに秘密報告がある。ここにいう「本処」とは、国民党の国際宣伝処のことである。

「本処の撮影の動機は、一九三八年春、本処の指導する国際新聞撮影社